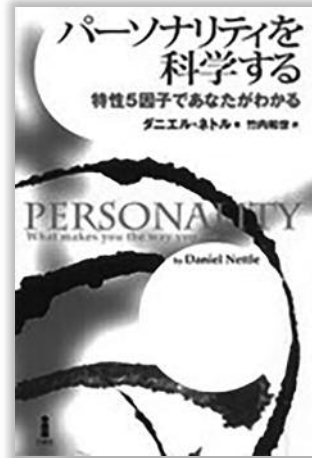


パーソナリティを科学する —特性5因子であなたがわかる—

ダニエル・ネトル 著 竹内和世 訳
白揚社 2009



所蔵館 請求記号

本館：K/141/N66

神田分館：/141/N66

[著者プロフィール]

ダニエル・ネトル

1970年生まれ

英国ニューカッスル大学生物心理学部准教授
人間と文化のさまざまな面について論じた著書多数

吉江 文男 (経済学部教授)

パーソナリティ科学の現状を解説した一冊。5因子仮説では、様々な性格要素を因子分析によって外交性、神経質傾向、誠実性、調和性、開放性という言葉に象徴される5つの因子に統合できると考える。著者は各因子のスコアの高い人と低い人がとる行動の背景を心理学、脳科学、遺伝学、病理学、進化学などの視点から総合的に捉えようと試みる。開放性というのは少し耳慣れないが、スコアの高い人が芸術家などに多いことから、著者はアレン・ギンズバークの詩を例に挙げて考察する。そして、開放性は別々に保持されている様々な情報処理ネットワーク間の相互作用の活発さを示すもので、高い開放性は、例えば文学における言語的創造性や多くの詩に見られる隠喩に繋がると指摘する。これは、開放性因子に認知要素の概念メタファーが含まれることを示唆している。

著者は、脳科学や遺伝学の進展が著しい現在はパーソナリティ科学のルネサンスであると言う。実際、脳科学はこれらの性格発現に関わる脳領域を特定し、そのサイズや興奮度が性格の個人差に影響することを次々と明らかにしている。性格の

個人差は環境と多くの遺伝子で決まる量的形質だが、脳領域のサイズや興奮度はそれらによって影響あるいは調節されるのだろう。著者は各中枢の領域とその障害によるパーソナリティの変化、極端なスコアに見られる病理、また外交性と神経質傾向の個人差を生み出す候補遺伝子などについてわかりやすく解説している。

著者は各性格因子のスコアの高い場合と低い場合それぞれの利益とコストを挙げ、どのような自然・社会環境がスコアの違いを生み出すのか考察する。同じ視点上にある国民性や民族性は、自然環境や風土、採集狩猟と農耕文化、米作と麦作文化などによって異なるとされるが、これらを生み出す自然淘汰や集団淘汰が実際に働いているのか今後明らかになってゆくだろう。

最近では、社交性や好奇心に関わる複数の遺伝子がヒトとイヌで共通すること、共に進化の産物である性格要素と道徳観や政治的信条との間に関係があること等もわかっている。ヒトと似た性格要素や道徳観がどのような動物で見られるのか想像しながら読んでみるのも一興である。